２　第２学年の取組

(1) 実践内容　「この町大すき！－こんなすてきな町なんだー」

①　はじめに

１年生から培ってきた人とのかかわり合いを大切にし、思いを高めるための言語活動を生かして、町たんけんを行わせた。今年度は、新たにコミュニケーションを行う力や他者と協力する態度などを身につけさせ、みんなが参加できるＥＳＤ活動を目指した。そのために、各教科を通して学習スキルを組み立てていくことにした。町たんけんでは、商店街に出かけお店の人や駅員さんにインタビューすることでわくわくする気持ちをもたせ、その後の活動につなげたいと考えた。実際に体験することでやる気を引き出していき、自分たちの生活とのかかわりや町のよさに気付かせることをねらった。

②　みんなが参加できるＥＳＤ活動

～コミュニケーションの仕方を学び、相手の気持ちを思いやる子を育てる～

ア　学級活動「１年生となかよくなろう会」（４・７・２月）

１年生が学校を好きになってくれるように、いろいろな遊びを一緒にした。

【１年生としゃぼん玉遊び】

イ　国語科「ともこさんはどこかな」（５月）

大事なことを落とさずに話したり聞いたりする学習活動を行い、町たんけんのインタビューの準備をした。

ウ　生活科「レッツゴー！町たんけん」（５・６月）

自分たちの住む町を歩き、町の自然、地域で生活したり、働いたりしている人々の様子を探検して見て回った。

【冬野菜を育てよう出前授業】

エ　生活科「おいしい野菜を育てよう」（５～７・９月）

農家の方から、種の選び方、撒き方、世話の仕方を教えてもらい、大切に育てて収穫することができた。

オ　道徳「あじさいの町（郷土愛）」（６月）

自分たちの町の好きなところや自慢できる事柄を見つけることができた。

【ＥＳＤ掲示板の工夫】

カ　学級活動「栄養士さんの出前授業」（10 月）

栄養士さんから給食ができるまでの様子を知り、感謝の気持ちが芽生え、残さずに食べようとする気持ちが育った。

キ　国語科「あったらいいなこんなもの」（11 月）

町にあったらいいなと思うものを話し合い、発表した。

ク　生活科「総合学習発表会」（11 月）

町たんけんでお世話になったお店の人やボランティアの方を発表会に招待して、劇やクイズなどでインタビューしたことを発表した。

ケ　生活科「お世話になった人へのお礼」（12 月）

収穫したサツマイモのつるを使って、グループごとに協力してリースを作り、町たんけんでお世話になったお店の人とボランティアの方に届けた。

コ　生活科「これまでのわたしこれからのわたし」（１・２月）

自分自身の成長を振り返り、今まで支えてくれた人々とのかかわりについて考えた。

③　教科との連携を図った授業実践

ア　生活科「総合学習発表会に向けて」

「こんなすてきな町なんだ」の単元では、春の町たんけんで目にした甚目寺商店街のお店や駅に行ってインタビューをした。113名が８グループに分かれて、ボランティア付き添いのもと、２か所ずつ訪問した。進んでインタビューができるように、事前に質問したいことを話し合いで決めた。そして、国語科で学習した「聞くときは大事なことをおとさないようにメモをとる」ということを意識させた。

【町たんけんの写真】

当日、児童は「肥料はどうやって作るのですか」「電車に乗るとどこまで行けるのですか」などの質問に答えてもらい、簡単なメモを取りながら探究活動を行うことができた。インタビューで見たこと、知ったことを総合学習発表会に向けてどのように整理し表現していくかについて、クラスごと、グループごとで考えた。劇、人形劇、ポスターセッション、クイズなど様々なアイディアが出され、「こうしたい！」という思いを形にして実践することができた。保護者からは、「商店街の古いお店へ行って、店の人と話す機会はなかなかないし、新しい発見もあり、よい経験だったと思います」「自分たちで考えて、協力して発表するとてもよい授業だと思いました」と感想が届いた。

【総合学習発表会の様子】

イ　ＥＳＤ国語科「あったらいいな、こんなものー甚目寺の町にあったらいいなー」（11月下旬）

総合学習発表会が終わり、「自分たちがお世話になった商店街の人達に何ができるか」を話し合った。そのヒントを得るため、国語科の単元「あったらいいな、こんなもの」で「甚目寺の町にあったらいいな」と思うものを学級で考えることにした。授業実践では、学級全体の発表に向けて、自分の考えをまとめ、分かりやすく相手に伝える力や、相手の考えを共感的に受け入れる態度を育てたいと考えた。

(ｱ) 導入の様子

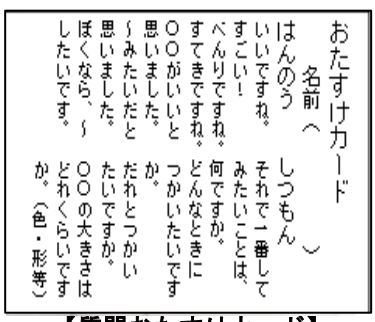
発表の練習をする際、ウォーミングアップゲーム（「これなあんだ？」ゲーム）を行い、リラックスしながらコミュニケーションが取れる雰囲気を作った。また、発表練習の進め方やルールを全体で確認した。うなづく動作や相づちを打つことによって、相手も話しやすいことを伝えた。

「これなあんだ？」ゲームについて
1.テーマから一つ答えを決める。
例「動物」…きりん
2.一人が「これなあんだ？」
と言って、ゲームを始める。
3.相手が質問を繰り返しながら、
相手の答えを当てる。

(ｲ) 展開の様子

話し手が自分の考えを発表した後、聞き手の児童が前時で作った質問おたすけカードを使用し質問をしたり、アドバイスをしたりした。話し手はその質問や意見を基に発表シートにアイディアの書き加えを行った。

また、話し手が一度目の発表の時にうまく説明できなかったことを修正して、ペアを変えてもう一度話し合わせた。視点の違う質問を受けることで、気付きが促され、より自分の考えを広げることが



【質問おたすけカード】

できた。

(ｳ) 終末の様子

話し合い活動をしたことによって、加えられた新しいアイディアを全体で確認し、相手に聞いてもらい、助言をもらうことのよさに気付かせた。質問おたすけカードを使用したことによって、どの児童も進んで相手に質問することができ、話し合い活動をスムーズに行うことができた。発表のときの話す順序と話形を示すことにより、書くことが苦手児童も発表の原稿を最後まで書くことができた。

【自分のアイディアを伝え合う場面】

(ｴ) 児童の感想と教師の反省

発表のときには、児童は自信をもって全体発表に臨むことができた。「遊具が自動で動く公園」や「甚目寺観音に落ちているゴミを拾ってくれるロボット」等、いろいろなアイディアがあった。「皆にアドバイスをもらうことにより自分の考えがまとめやすかった」「自分の町のために、いろいろなアイディアを考えるのは楽しかった」という感想が聞かれた。反省点は、電子黒板等、視覚的な教具、教材を多く使用したが、それらを使いこなせず、児童を困惑させてしまったことである。

【視覚的な教具を使用】

④ その後の活動

「もっと行きたいな町たんけん」の単元では、最後に手紙やプレゼントでお世話になった人達にお礼の気持ちを伝えた。収穫したサツマイモのつるでリースの土台を作り、各自が家から持ち寄ったリボンやレースの切れ端、拾ったまつぼっくりなどで思い思いに飾り付けをした。お店や駅に届けに行くと、電気屋さんはさっそくリースを飾って「１年間こうしておくから、いつでも見に来てね」、新聞屋さんは「発表会、見に行きましたよ。工夫されていい発表でした」などの声をかけてくださった。こういった地域の人の温かい言葉やまなざしが児童の意欲を高めたり、情操を育んだりすることにつながる。

【お礼の手紙・リース渡し】

「つたえ合おう町のすてき」の単元では、商店街の「すてき」をパネルにまとめて、地域に発信するために公民館、商工会議所、七宝庁舎に届け、町の人に見てもらった。

(2) 実践の成果と課題

体験活動と表現活動とを相互に繰り返しながら、自分たちの思いや願いを実現していくプロセスを通して、児童はコミュニケーションを行う力や他者と協力する態度を身に付けることができた。例えば、転校していく友達に対して「先生、○○ちゃんのお別れ会をしたい」と仲間と協力して会を計画する姿が見られた。

【お別れ会を計画する様子】

課題として挙げられるのは、町たんけんで毎年お世話になっているお店の中には、高齢化社会の影響を受けて後継者がいなくなり、閉店するお店も出てきた。そのため、地域の特性を活かした学習が難しくなってきたので、町たんけんの訪問先を新たに開拓していく必要がある。